

敦煌図案の色彩構成原理研究

Principle and Composition of Dunhuang color pattern

鄭 曉紅 Zheng Xiaohong 中国人民大学

Renmin University of China

Keywords: 敦煌図案, 退暈, 色彩調和.

1. はじめに

中国敦煌莫高窟造形芸術は、秦建元二年(紀元 366 年)から建ち始め、16 の歴史時代を経て、総面積が 45000 平方メートルの巨大な洞窟壁画や彫刻群を形成した。それは人類の芸術史上で最大な最古の壁画芸術の聖地である。全ての壁画がインド、古代中国や西洋地域との文化交流の総合芸術の結晶である。中西融合な色彩が豊かさを十分に表し、仏教精神や中国文化の影響等を感じさせ、輝いた人類の文化遺産である。中国色彩芸術の最高なレベルに達成した。

2. 各時代の敦煌図案の配色の特徴

敦煌図案を整理や研究する内に、各時代の敦煌図案のスタイルの進化、風格や特徴の違いが色彩に反映した事をはっきり見ることができる。

北魏時代(紀元 386~557 年)は、土赤を基本色調にし、間に石青色、石緑色、黄土色等 3 つの色彩を挿入し、最も深い褐色(暖かい黒に近い)を用いて、石青色、石緑色、黄土色の明るさを引き立ち、白色線で画面を統一感を形成し、質朴で強い色彩効果を表した。

西魏時代(紀元 535~557 年)は、淡い黄土色を基本色調にし、間には石青色、石緑色、熟褐色を主とし、赭石色で線を描き、統一感がある画面効果を表現し、明るく、活発的な、落ち着いた色効果を形成した。

隋時代(紀元 581~618 年)は、主として淡い土赤色や石青色を基本色調にし、間に辰砂色、石緑色、黄土色を対比に用いて、特徴がある「白色連珠紋」や「熟褐色連珠紋」に滑らかな白い線を加え、調和効果アップし、同時に、金箔を用いて、美しい華麗な効果を達成した。

唐時代(紀元 618~907 年)は、石青色、石緑色、

中黄色が基本色調として、間に朱色、赤褐色など一つ色つづ輪郭線を平行し、濃い色から薄い色まで等距離な線を描き、「退暈」の効果を表し、中でも金箔や銀箔を用いて、白線と黒い線を描き、一層輝きを引き立て、精緻や重厚な華麗な効果を表現した。

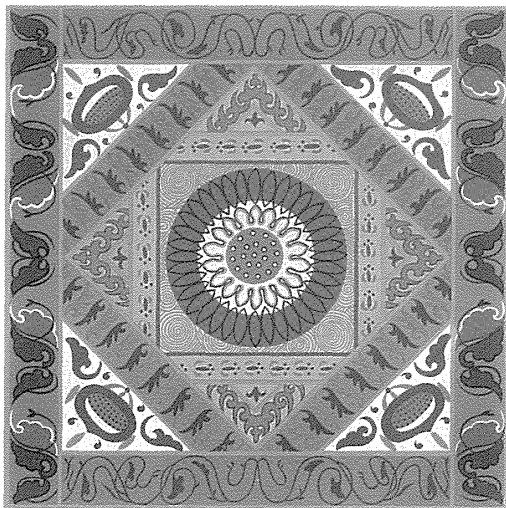
宋時代(紀元 960 年~1279 年)は、石緑色、黒色を基本色調にし、間に浅い土赤色、灰青色を挿入し、赭石色の線で統一感を見せ、冷たい色調や重ね効果を表した。

敦煌図案の配色は、初期の単純や誠実さ、中期の精緻や華麗さ、末期の平板や落ち着き、各時代敦煌図案の色彩の進化と中国の歴史、文化、審美の変化に深く関わった。配色の効果の発生は、主に色配置の比率、寒色や暖色の明度、彩度等の面積によって実現し、最も大事なものは、基本色調を与える視覚効果である。各時代の敦煌図案の色彩の視覚効果は豊富であり、用いた色相は複雑ではなく、主に暖色系の赤色、黄色、黄土色、褐色、熟褐色、辰砂等である。寒色系は石青色、石緑色、灰青色等である。無彩色系は白色、黒色、金色などである。主に基本色調は寒色系あるいは暖色系を把握し、全体的な色雰囲気形成した。基本色調と構成した他の色は、色数の多い少ない、使用面積の大きさ、分布と外形などは、図案の繁簡程度を決まる。

3. 敦煌装飾図案色彩に含まれる色彩構成の調和原理

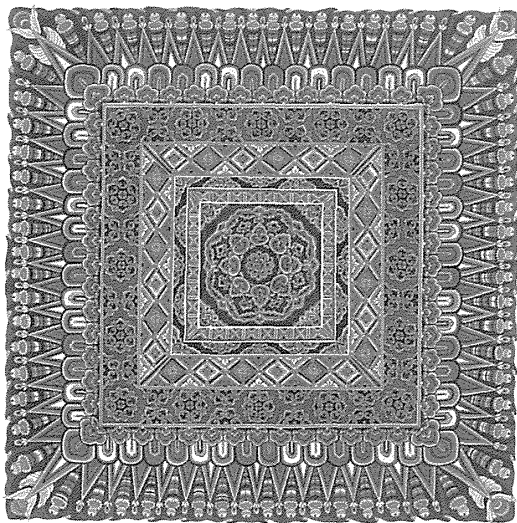
図案学者雷圭元さんの著書でまとめた中国伝統図案の色彩法則：「1、色彩の遠効果を注意する事；2、対比色相を運用する事；3、黒色、白色、金色、銀色などで線を加える事で、色彩調和させる事；4、対比色相や構図に動と静をかみ合う事；5、民族的習慣を注意する事；6、素材自体の色彩を上手に利用する事」。以上まとめた法則は、敦煌図案の色彩構成の調和原理でもある。

敦煌図案の配色は色彩全体の統一した画面効果が注意した。全体の効果は、図案自体が明確した統一な色調があり、赤色や緑色等、または寒色系や暖色系を決まり、決して乱す事がない。例えば、北魏 251 窟の平棊図案は（図 1）、大面積の暖色系の土赤色を基本色調にし、鮮やかな石緑が主に線や点等で挿入し、小面積で平塗りをする。全体の色調は土赤色調であり、人に明確な深い印象を与える。



（図 1）251 窟の敦煌藻井図案

そして、49 窟の敦煌藻井は盛唐時代（約八世紀上半）の天井飾りである。構図や造形は非常に複雑であり、色調が依然として統一である。藍緑色を基本色調にし、間に小面積の土赤色を挿入し、とても優雅で落ち着いた華麗さがある。図案全体が色調統一のほかに、石窟全体の色調も一体化した。敦煌藻井の図案は洞窟壁画の構成の一部であり、図案の色と洞窟全体の環境を高度な統一感と調和感を保つ。



（図 2）49 窟の敦煌藻井図案

敦煌図案によく使われる調和方法は次の通り：

- 1) 色相と面積の比率による調和方法である。例えば、北魏時代の図案が、常に土赤色と石緑色等コントラストが非常に強い補色対比を用いて、土赤色が大面積の基本色調にし、石緑色が小面積にし、コントラストが有りながら調和感を取る。
- 2) 小面積の色を交差循環に使う。二つあるいはそれ以上な対比色相を調和する時、小さい面積の色相を組み合わせにより、とても綺麗で震える輝く効果が表現できる。例えば 407 窟の千佛図案は、土赤色、石青色、石緑色等、三種類の色相をの交差循環にして規則的に配置し、近くで見ると色相対比効果が強く、遠くから見ると、印象派の色の使い方と良く似ている。色彩が空間の中で視覚的に混合し、全体で輝く華麗さを形成する。
- 3) 無彩色の黒色、白色、灰色、金色などで線を描き、対比な色相を間隔し、強烈な色彩対比に統一感と色彩調和を与える。
- 4) グラデーションの方法で色彩の調和関係を獲得する。例えば、唐時代の敦煌図案にとっても広く使われる「退暈」方法が、一つの色相を濃い色から薄い色まで表現し、色彩の豊富さに統一感を与える。
- 5) 色相の関連性とリズム感を注意する。一つの図案の中で、一つの色相決して孤立して存在する事ではなく、何らかの秩序でリズムがある法則に従って、繰り返して画面に違う位置に配置し、互いに依存する。色相の繰り返しの登場する事により、リズムがある動き、変化がある豊富な色彩効果も表現した。少ない色相で、豊かな色彩感を生み出す。

4. まとめ

以上の分析を通じて、中国の伝統的な敦煌図案の色彩構成原理に、色彩調和の法則が含まれている。21 世紀に入って、中国の色彩デザインがどの様に深化させ、中国の文化特色を表し、民族精神があるデザインスタイルを確立する事も注目の話題になった。中国伝統的な色彩の学習、研究と現代色彩構成の科学的な分析理論との結び着く事が、私達これから思考しなければならない問題である。

参考文献

- 1) 雷圭元：『雷圭元論図案芸術』（1992）浙江省美術学院出版社, pp146
- 2) 常沙娜：『常沙娜文集』（2011）山東美術出版社, pp15-16